
用心棒は厄介者！？

烈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

用心棒は厄介者！？

【Zコード】

Z5746C

【作者名】

烈

【あらすじ】

この話は、**桜牙優斗** （おうがゆうと） と云う少年が、両親の雇つた東海道拓弥（とうかいどつたくや） といふとてもやっかいな用心棒に振り回されるという話。

第1話・用心棒＝変人？

「フワアアア。眠い・・・・・。」

俺は、**桜牙優斗**。ぱりぱりの中学二年です。

「今日はあいつが喜ぶのにしないとなあ。」

あいつ、確かミートソーススパゲティが好きだつたよなあ。ミートソースとパスタはあるから
良いだろ。彼奴つてのは、義理の母さんの子供、ナンだけど・・・。
まあ帰つてからのお楽しみだ。さあ、帰つて昼寝だ。

「ただいま。」

「オッカエツリナツサーカイ。優斗兄ちゃん。」

「おう。ただいま。」

此奴がさつき話してた義理の弟の**桜牙翔太**。一番目にやつかいな奴
だ。

「にいちゃん。今日の晩ご飯何い。」

「お前の好きなミートスペゲティだぞ。」

「やつたぜえ。」

此奴がやつかいなのは、多重人格。今みたいにとても優しそうなと

きもあれば、とても怖そ
なときがある。俺でも手が付けられない。

ただ、この中で一番やつかいなのは・・・、あの人だ。

「あのねえ。今日はねえスペゲッティなんだよ。」

「・・・・・・。そ、うか・・・・・。」

暗いな、おい。

「すいません。拓弥さん。きょうは翔太が好きなのを作ります。」

「・・・・・、俺は何でも良い。」

相変わらず無口だな、おい。

彼は、東海道拓弥さん。俺達の用心棒。とうかいどうたくや魔界から来たらしい。何で用心棒が居るのかって。俺達の母さんと父さんは、スイスに住んでるんだ。そこに俺の父さんが社長の会社があるから、スイスに居るんだ。翔太の世話役も担当してもらってる。

「兄ちゃん。早く御飯作つてよお。」

「わかったわかった。今作るから。」

ああ。これで今日の睡眠時間が削られる・・・。

「兄ちゃん。あのねえ。」

「うん。」

ビシコ

何をしたんだ・・・。

「あはははは。おもしろい兄ちゃん。」

「晩飯抜きにスッぞ。」

「イヤーダア。」

すぐによくなる。これが多重人格のひとり、「こね翔太」だ。

「じゃあもうやめる。いいな。」

「ハイ

なんか、今日は誰かが来そうな雰囲気だ。

ピーンボーン

玄関からといふことは・・・。

「優斗くん。」

まさか「」の声は・・・。

「西さん。なんですか。」

「いや～。良いにせいがしたからわあ。」

この人は、かんなれきあかね神崎西さん。大学二年つて言つてたかな。つーか、あんたの鼻ぬ子こだけ凄いんだよーー！

「何か言つたア？」

にたあ

「何も言つてしません・・・・・。」

怖ええええ・・・。逆らえないと・・・。

「今日も『うやうやしく』してくれるよな?」

「はい。そりや勿論ですよ。」

はああ。この人が来ると食費が・・・。

「あ、西お姉ちやんだあ。こりつしゃーーい。」

「いんばんは。翔太君。」

「いんばんは。西さん。」

あ、出てきた・・・。拓弥さん。

「人生ゲームしよお。みんなでさあ。」

「やうねえ。しましょうか。」

「あ。俺バス。」

「こいつらと人生ゲームすると何かしらやつかいなんだよな。」

「私も混ぜてくれますか。翔太さん。」

「うん。みんなでやうわ」

散らかさなきやいいけど。。。

「テレビでも見てよーっと。」

一分後。。。

なんか、弟の部屋が騒がしいな。。。ナンだよ。まだ一分ぐらい
しかたつてねーぞ。

「にいちゃーん。拓弥さんが人生ゲームのボードを壊しちやつたよ
おー。」

「うん。まさか、順番を最後にしたんじや。。。」

「うん。ジャンケンで負けたから拓弥さんが最後。。。」

「大変な」としちやつたよ。おい。。。。(拓弥は順番などが最後に
なると暴走して手が付けられ

なくなります。)

「こも、茜さんが必死に押されたり。 . . 。」

凄いな茜さん……

「早く。」

「おひ。」

弟の部屋に行つてみると悲惨なことになつていた。

「早く止めり……押されたりるのが精一杯だ……」

十分凄いです……

「えーと……、翔太。水持つてこい。コップ一杯で良い。」

「うん。わかつた。」

よし。これで拓弥さんは止められるナビ、ソレまで持ちこたえられるか……。

「ちよっと、あんたも押さえなさいよな……」

「ああ。すいません。」

俺も暴走した拓弥さんを止める。

「兄ちゃん。」

翔太が来た。これで暴走が止められる。

「スイッチに届かないよーー！」

ハイ？ 何て言いました。

「だからーー！ スイッチに手が届かないってこいつてるのーー！」

マジですかあーー！

家は水道がボタン式

「優斗ーー！」 は任せて水を取りに行くのよーー！」

「はいわかりましたーー！」 はお願いしますーー！ 翔太ーー！ 茜さんを手伝え！ 「怪力翔太」になればいけるだろーー！」

「うん！ わかった。」

「げつなんだこれ。」

「！」の居間もまた悲惨な光景になっていた。

凶暴な拓弥さんの取り押さえに茜さんと翔太が頑張ってる間に・・・。

「後で片付けないとな・・・。」

「ソンな」とより、水を取りに行かないと、茜さんに殺される・・・。

水をコップ一杯に入れこぼれないように慎重に運んでいく。

「ほかない」ように慎重に慎重に・・・。

ハ
シ
ヤ

—

早速に迷いちやいました

早く取りに行けえ !!! 優斗おおおおお !!!

「はいイイイイイイイイ！」

俺はカテになつたエッカを持って炊事場に急ぐ。

アンアン

ナンか焦げ臭いな・・・。ハツ、ミートソースを温めてたことを忘
れてたあああ！！

俺は急いでコンロの火をとめた。

ふう、危なかつた。後一步で弟に殺されるとこもだつた……。

さてと、水を持っていかないとな。

俺は二回目の水くみをして、弟の部屋に持つていった。また災難が俺のみに降りかかるつた。

ドスン！－

俺の足に弟の膝が思い切り直撃したのだ。

「いつてえええええええ－！－！－！－！－！」

バシャ

・・・・・。バシャ？？

「ねえ・・・・。何でまた失敗してるの・・・・。」

かかつた相手が悪かつた。茜さんにかかつてしまつたのだ。

「水ぐみにいつてきマース・・・・。」

「早くね。」

ああ。やばかつた。殺されるかと思った・・・。

俺は、本田三回目の水ぐみへ行つた。

ジャー

ポチ

さてと、早く持つていくか。悲惨な状態になつてなきや良いけど。

「水を持って来ました！茜さん、翔太！」

「早くぶつかかれ……。」

バシャ

「あれ……。私は何をしていましたんでしょ。思い出せませ……。
。」

「あれだけのビビちゃん騒ぎましたのに……。」

「そう。こんな事があるとその時の記憶は全く残ってはいないのだ。
ナンつー迷惑な話だわ。」

「わあ、みんな晩飯の前にいいの部屋と居間片付けをしてもいいわ
か……。拓弥さん。茜さん、翔太。」

「えー！御飯食べてからで良いじやん。」

「せうだぞ優斗！後ででも良いだわ。」

「良こか？ しりか……。」

「はこ……。」

よし。これで部屋も片づいたわ。わひと、俺は茜ちゃんと一緒に居間
の掃除をするか。

。 ただ、晩飯を食べるのが十時過ぎになるとせぬこもしなかった……。

第1話・用心棒＝変人？（後書き）

作者の烈です。これで一作品目になります。ふつつか者ですが、宜しくお願いします。

連載です。「用心棒は厄介者！？」を宜しくお願いします

第一話・夏休み

今年の夏休みもあと少し。今年こそはのんびり行きたいなあ。

「一、マイチャーンー！」

そらきた。ピッセまた、宿題の手伝いでもしらつてんだろ。

「宿題なら手伝わないぞ。」

「違うよお。ねえ、明日さ、海行くでしょ。」

夏休みも最後に近いから拓弥さんの車で一時間近くの海に行く」と
にしていたのだ。

「それが、どうかしたのか。翔太。」

「水着がちっちゃいんだ。」

「ぶつ。

「兄ちゃんいま笑ったでしょ。」

あれ聞こえたみたいだ。

「おまえさ、スクール水着で良いじゃん。今年買ったバツがだろ。」

「違うの。プライベート用の水着が欲しいんだ。」

ふーん。別にいらない氣もするけど俺も水着買わないとな。

「じゃ、今日買いに行くか！翔太！」

「やつたぜえ！これで友達に自慢できる。」

「ふん！といい、とても上機嫌な翔太。

「拓弥さん。拓弥さんの水着まだ着れますか？」

「・・・・・・・・」

「着れないんだな・・・。まあ、わかつてたけどな。

「じゃあ、今日水着買つんで、一緒に選びませんか？」

と拓弥さんに聞く。いつもなら行かないと言つが、今日は違つた。

「私も行きます。」

「決まりだな。

「拓弥さん。車の運転宜しくお願ひします。」

今日はちょっと遠いデパートに行つた。こっちの方が種類が豊富だからだ。翔太は車に乗つてるときにも、「やつたぜえ！」とはしゃぎまくつてた。

「つきました、優斗さん。翔太さん。」

黒塗りのベンツに揺られること一時間。

「兄ちゃん！ 拓弥さん！ 早くうーかつこいい水着買つんだからあ。」

「ハイハイ、わかったからその前に昼飯食つぞ！」

「ハーイ！」

さーと、何処で食うかな・・・。

「兄ちゃん。ハンバーグバーが良い。」

「よしよし、ハンバーガーな。」

やつぱりそうきたか。俺ハンバーガー大嫌いなんだよね。まあいいか。

「拓弥さん買つてきますんで何が良いですか。いつもので良いですか？」

「ああ。いつもので良い・・・。」

「僕は・・・。」

「スペシャルバーがな。」

さてと、おれは翔太を拓弥さんに任せ、俺はハンバーガー屋に行つた。

「えーと、ダブルチーズバーがーセット一つと、スペシャルバーが

一セグメント一つで、あと単品でポテトとナゲットください。」

「かしこまつました。」

と、無料笑顔をもりい、拓弥さん達の所へ帰った。

「帰つてきた、早く兄ちゃん！！」

この一人は思いも寄らぬ早さでハンバーガーを一分で間食した。スゴシ。

「食べ終わつたし水着を買いに行くか。」

「うん。買つ買つ…！」

水着売り場コーナー

うーん、俺はこれにするかなあ・・・。これで良いかな。けつこーかつこいいし。俺のからは黒い下地に赤と青の龍が描かれていると いうものだ。

「兄ちゃん。これでいいや。」

「私はこれで・・・。」

えーと、翔太のは・・・。黄色の下地に思い切りアンパンマンのトリオがのっている。

「翔太。これはやめた方が良いと思うけど・・・。」

「…」れがこいの・・・。

弟のセンスのなさにちよつと悲しい気がある・・・。トホホ・・・。
次は拓弥さんのえをみる。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

さすがの翔太もビックリしているようだ。なぜなら・・・。
「いかがでしょ」・・・。

デリヘルのキャラが勢揃いの水着を持つてきたのだ。

「拓弥さん。ソレはやめた方が良い」と思ひ。

「僕も思つ・・・。」

と、翔太。てめえも人の事言えねえよー

「俺が選ぼうか?」

「お願いします・・・。」

「じゃあ、それ返ってきて。」

「はい・・・。」

ふつ。アブねえ。後一歩で変態に見られるかと思つた・・・。

「返してきました。」

「うん。」

俺が思つて、拓弥さん黒とかに会つから、黒の生地だけの海パンにした。

「これで良こよね。拓弥さん。」

「はい。」

あまつとい。んじや、会計しますかね。

「会計五千五百五十円です。」

ハイハイ……。つて、ええ! 何でトリプル五一! ラッキーな五なのかおい! !

「有り難うございました。」

あ、買つものも買つたし帰るか。

「帰ろ~。早く家に帰ろ~。」

「ハイハイ。」

とこうことじで、明日の海に備えてサッサと帰る俺達だった。

第一話・夏休み（後書き）

遅くなりました。これからも宜しくお願ひします。

第三話・夏休み・続編・その弐

ピンポーン

「アッ友達だー行つてぐるね」

「うん。」

今日は弟が待ちに待つていた海に行く日が来た。

「おじやまします。」

「イラシシャイ。」

そつ軽く言ご、『一ヒーのおかわりをしよう』と席を立つた。

「ああ。座つて良いよ。まだ全員集まつてないから。」

「はー。」

礼儀正しい子だなあ。あんな奴が弟が良かつた。

「僕の部屋に来てー！」

「うん。」

ふう。お菓子でも出すかな。ん、そつこや拓弥さんは何処に行つたんだ？まだ寝てるのかな？

「おはようござります。」

「おはようござります。」

今日は機嫌が良いみたいだ。いつもなら……。

「拓弥さん。拓弥さん!」

「うへん……。」

「スッ

ところの感じで蹴つてくるのだ。昨日の蹴りは痛かった……。

「私にも珈琲入れてくれますか?」

お、かつこにいじやん。漢字でコーヒーなんてさ。

「はいよお。」

俺は拓弥さんの分までコーヒーを入れる。

ピンポン

「翔太でろあ。」

「ハ～イ。」

・・・・・・。

＝＝一時間後＝＝

「揃つたか。翔太。」

「うん。揃つたよ！」

じゃあ、行くか。

「行くぞオ！」

「　　「お-----!!!!」」

「じゃあ、下に降りて車に乗れ！」

「ハ---イ。」

今から、海へ行く・・・・。どうなる事やら・・・・。

＝＝一時間後＝＝

「着いたぞオオオ！！！」

やつと海に着いた俺達。一応、翔太の仲間を紹介しよう。

一人目

今池拓人スポーツが得意と言っていた。

二人目

神田亮介。 こいつは、顔が良い。限りなくな……。絶対もてる。ちなみに、茜さんの弟らしい……。可愛いそつこ……。

三人目

黒沢俊哉。 こいつは勉強ができる。なんか、高三の勉強ができるとかできないとか……。

一時間後……。

そろそろ「腹減ったー。」とか言つてくるだろ。弁当の用意しつか。

「にーちゃー……。」

「ほり弁当。持つてきたから、みんなで食べよ。」

「よっしゃー！みんな、兄ちゃんの料理はおいしいんだよ。」

中々うれしい」と言つてくれるじゃねーか。

「さつ、みんな腹減ってるだろ？早く食べな。」

「 」「ハイ。」「 」

うん。今のは翔太が入ったからな。拓弥さんじや無い。そついや拓弥さんは何処に……。

「へーい、彼女。一人？」

「いえ違います。」

ナンパ中でした しかも失敗しちゃつてるよ・・・。虚しいな・・・。

「拓也わーさん。飯つすよ。食べないんですか?」

「いえ、頂きます。」

「はい。これ皿です。」

「面田無い。」

「ふう・・・、俺ため息ばっかりだな・・・。」

「兄ちゃん。食べ終わつたからみんなの分のお金ちゅううだい。」

「あ? 何で金がいるんだよ。」

「かき氷」

成る程ね。だからみんなの分も買つて訳か。

「翔太あ・・・、俺達別に良いよ・・・。」

「何でみんな食べたいつていつたじさん。」

「ちよ・・・、翔太あー。」

ふーん。俺に気を遣つてるつて訳か。別にかき氷ぐらーこの金ならだすけどな。

「気にしなくて良いよ。出すから。何円だ、翔太？」

「一百五十円」

千円で足りるか。

「ほい、千円。おつりもってこいや。」

「ハイ！みんな行こう」

「翔太、良いのか？」

「いいのいいの。早く行こう。なくなっちゃうかもしれないよ。」

「すいません。お兄さん。」

ほお、ホントに気を遣つてやがる。礼儀正しいな。

「いいよ。翔太から誘つてきたんだ。別に良いって

「ありがとうございます。」

「行くぞー。」

元気がいいな。サッサと片付けて寝るか・・・。ふあ、眠・・・。

「にいちやーん。」

この間抜けな声は・・・。

「はいお釣り。」

「はいはい、かねたりたか？」

「バッチー足りたよー。」

「お～そつか。良かつた。」

「んじゃ、寝むか。」

「あのわあ～・・・・。」

ペチャクチャペチャクチャ

ウルセヒ～・・・・。

「お～。お前ひりひりとひるわこ～。」

「は～。」

つたぐ。これでやつと寝れる・・・。

「テも兄ちゃん・・・。もう夕方なんだけビ。」

「ナ～イイイイイイーーーー。」

・・・。夕方だ・・・。

「わ～、帰りましょ～か。」

「うん。」

「荷物は積んであります。着替えて駐車場に来てください。」

「はーい。」

「俺は何をしに来たんだろ？・・・ここにいつらのせいドH痴無しだあ！！」

「兄ちゃん。帰らないの？」

「帰る・・・。」

「のまま、友達を送った後、カラオケや買い物などに付き合わされたのだ・・・。」

第三話・夏休み・続編・その弐（後書き）

今回は「メテイーがあまりはってません。

メテイーなのにすいません。

優「ホントわりいな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5746c/>

用心棒は厄介者！？

2010年10月28日03時40分発行